

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	「1084」における〈オウム〉脱構築の可能性：教祖像と〈家族〉の復権
Author(s)	山根, 由美恵
Citation	近代文学試論, 57 : 59 - 72
Issue Date	2019-12-25
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50491">10.15027/50491</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050491">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050491</a>
Right	
Relation	



# 「1Q84」における〈オウム〉脱構築の可能性

— 教祖像と〈家族〉の復権 —

山根 由美恵

## はじめに

二〇一八年七月六日―麻原彰晃（本名・松本智津夫）他六名、七月二六日―岡崎一明他五名、計十三名の死刑が執行され<sup>(1)</sup>、突然の集団死刑執行に世界中が驚愕した。一九九五年三月二〇日に起きた地下鉄サリン事件を契機に行われてきたオウム真理教（以下、〈オウム〉と記す）事件は、この死刑執行により一つの決着を迎えたと言える。ただ、教祖・麻原彰晃が無罪を主張し、その後黙秘を続けたこと、キーマンである村井秀夫が刺殺されたことにより、〈オウム〉の犯罪は全容解明されてはいない。地下鉄サリン事件は風化しつつあるが、〈オウム〉の後身であるアレフは現在でも新しい信者を獲得し続け、その資金源も十億円を超え<sup>(2)</sup>ると言う。〈オウム〉事件は未だ終わってはいないと言えよう。

村上春樹が「麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語を、サブカルチャーの領域であれ、メインカルチャーの領域であれ、私たちは果たして手にしているだろうか？」（「アンダーグラウンド」七〇四頁）と現代文学の担い手である自らを含めた強い自戒と重い問いを發したように、〈オウム〉事件は現代の表現者たちに

衝撃を与え、ノンフィクション、文学、映画、アニメなど、様々な媒体でその闇に迫る試みが続けられてきた。

〈オウム〉関係の文学は次の四つの傾向に分けられる。〈オウム〉がモチーフのもの（Ⅰ）、サリン被害者がモチーフのもの（Ⅱ）、多くの事件の一つで取り上げられているもの（Ⅲ）、影響を受けたが、直接的に描いていないもの（Ⅳ）である。このうち、Ⅰは〈オウム〉の物語化に近いもの（Ⅰ―Ⅰ）と〈オウム〉を連想させるが、そこから発展させた宗教を描いたもの（Ⅰ―Ⅱ）に細分化できる。Ⅰ―Ⅰには、佐木隆三「慟哭 小説・林郁夫裁判」（二〇〇四）、馳星周「煉獄の使徒」（二〇〇九）、田口ランディ「逆さに吊された男」（二〇一七）、濱嘉之「カルマ真仙教事件」（二〇一七）。Ⅰ―Ⅱは、大江健三郎「宙返り」（一九九九）、新堂冬樹「カリスマ」（二〇〇一）、野沢尚「魔笛」（二〇〇二）、村上春樹「1Q84」（二〇〇九）、中村文則「教団X」（二〇一四）がある。Ⅱは、辺見庸「ゆで卵」（一九九五）、重松清「さつき断景」（二〇〇〇）、馳星周「9・11倶楽部」（二〇〇八）、川上弘美「水声」（二〇一四）。Ⅲは加賀乙彦「雲の都」（五部作 二〇〇二〜二〇一〇）、奥泉光「東京自叙伝」（二〇一四）、森村誠一「運命の花びら」（二〇一五）が、Ⅳには有栖川有栖「幻想運河」（一九九六）、恩田陸「Q

& A」(二〇〇四)がある。

「1Q84」は、村上が二十年以上の時を経て、新興宗教を全面に取り上げたテキストである。これまでに大江健三郎「宙返り」「取り替え子」と比較されてきたが、他の〈オウム〉をモデルとする物語（以下〈オウム〉物語と記す）との比較は行われてこなかった。〈オウム〉物語群の多くは、メディアが報じた麻原彰晃像と重なる教祖が描かれている（好色・強欲・学歴コンプレックス等）。対して、リーダーは深い知性を持った人物であり、それは多くの〈オウム〉信者が語っていたカリスマ性と関係する。本稿では、「1Q84」の教祖像と〈オウム〉が否定した〈家族〉の関係に注目し、テキストが〈オウム〉を二段階にわたって脱構築している様を考察する。これら二つの〈オウム〉脱構築は、村上が二十年以上問い続けた「麻原の荒唐無稽な物語を放逐できるだけのまっとうな力を持つ物語——〈オウム〉やシステムに対抗していく物語——を指す試行であるからである。

### 一 〈オウム〉物語群の語りの方角性

生駒夏美氏は〈オウム〉物語群の語りの方角性を、1「劇画的陰謀史観型語り」、2「麻原集約型語り」、3「周縁へのずらし型語り」という三つに分けている<sup>(4)</sup>。1「劇画的陰謀史観型語り」は、「麻原彰晃を宗教性の欠片もない、強欲で世俗的な小心者」とする「オウム真理教そのものを宗教から切り離して矮小化し貶める」語りである（一橋文哉「オウム帝国の正体」(ノンフィクション 二〇〇二)、生駒氏の指摘にないが馳星周「煉獄の使徒」も該当すると考えられる）。

2「麻原集約型語り」は、「サリン事件の動機などの不可解さを、結局は、麻原教祖の不可解さに還元する」語りである。新藤冬樹「カリスマ」では、主人公神郷宝仙（本名岡崎平三郎）が詐欺師の設定で、金銭面の強欲さと巨大な性欲の持ち主として描かれている。神郷の闇は、カルト信者だった母が父を殺して自分も割腹自殺したことによるトラウマから生まれている。氏は「教団全体と教団の行った犯罪は、すべて教祖の奇矯さに起因するものと無害化され、一方で教祖が途轍もない「異常性」を帯び」ており、「教祖も結局、幼児期のトラウマが原因でそうなっただけの哀れな存在で、本来は「異常ではなかった」としてその「異常性」は回避されている」と指摘している。（その他、野沢尚「魔笛」にはレズビアンの教祖の「異常な性欲」が、佐木隆三「大義なきテロリスト——オウム法廷の16被告」(ノンフィクション 二〇〇二)では一六人の被告たちは何らかの形で彼(引用者注 麻原)の被害者であるという姿勢を取る隠れた「麻原主義」と評している)

3「周縁へのずらし型語り」は、中心から少し離れた視点で見ようとする語りである。村上春樹「アンダーグラウンド」(一九九七)、「約束された場所で」(一九九八)では、村上が目指した「健全な市民」対「顔のある」悪党たち」という図式が壊れるところまでは到達しなかった」と評している。また、森達也「A」(映画 一九九八)の「わからないことをわからないと潔く認め受け入れるという困難さを、この著者は引き受ける」と述べている。（その他、「カナリア」(映画 二〇〇五)に言及)

生駒氏は、1〜3まで麻原あるいは〈オウム〉に対して、対抗する物語づくりを目指し、それに失敗していると結論づけ、新しい物語の

可能性として大江健三郎「宙返り」（一九九九）を挙げる。「宙返り」は、教祖自体が自らを貶めテロを止めている点、案内人<sup>ガイド</sup>を失った以後の師匠<sup>パトロン</sup>の宗教が言語化されない点（オウム）が目指した電子的「身体」との対照）、教祖への依存からの脱却という点で評価している。

生駒氏の述べる三つの語りは有効であるため、氏の論考後に発表された物語・中村文則「教団X」、濱嘉之「カルマ神仙教事件」、田口ラディ「逆さに吊された男」の分類を試みる。

「教団X」は、カルト教団Xにおける奔放な性の在り方やナンバー2の高原が企図したテロ等を見るに、既存の〈オウム〉像の枠内のカルトとなつている。教組・沢渡には痛みを苦しむ女性に欲情する異常性という「麻原集約型語り」の面が見られ、新藤冬樹「カリスマ」と同様のトラウマをめぐる物語である。「教団X」の独自性は、今一人の教祖である松尾が語る量子力学、遺伝子等と宗教の繋がりに関する挿話と言えるが、物語の軸と有機的に結びついておらず、書評等で空回りの印象を多く持たれている。

「カルマ神仙教事件」は、〈オウム〉事件捜査に従事した元公安・濱の著作であり、ノンフィクションに近い物語となつている。「劇画的陰謀史観型語り」の面も持つがカルマ神仙教（≡オウム真理教）像はそれほど目新しいものがなく、公安がカルマ神仙教の犯罪を防げなかった理由を語る物語であるため「周縁へのずらし型語り」と分類できる。

「逆さに吊された男」は、田口と「殺人マシーン」と呼ばれた林泰男との十年に及ぶ交流を基にした小説であり、殆どがリアルな体験と推測されるが、最後にフィクションが付加されている。分類としては、「周縁へのずらし型語り」となり、田口は十年の交流の結果、「誰も、

なんにも、わかっていない、ということだけが、わかった」（二〇九頁<sup>5</sup>）と述べる。これは森達也「A」と同様に「わからないことをわからな」と深く認め受け入れるという困難さ」をフィクションで描き出したと評価できる。〈オウム〉の実像に迫れば迫るほど不可解さが増すという逆説的な現象が起きていることは留意すべきである。

「1Q84」は、〈オウム〉物語群や「宙返り」とは違う形で〈オウム〉脱構築を行っていると考えられる。本稿では、〈オウム〉物語群と異なる教祖像と〈オウム〉が否定した〈家族〉の関係に焦点を当てたい。

## 二 「1Q84」における教祖像

### — 一つ目の〈オウム〉脱構築 —

〈オウム〉物語群では、教祖の俗物さを側近が知っており、軽蔑するといった展開が多い（「カリスマ」「魔笛」「カルマ神仙教事件」等）。対して、「1Q84」のリーダーは、「カラマゾフの兄弟」を引用しながら、「この世には絶対的な善もなければ、絶対的な悪もない」、「善悪とは静止し固定されたものではなく、常に場所や立場を入れ替え続けるものだ。ひとつの善は次の瞬間には悪に転換するかもしれない。逆もある。（略）重要なのは、動き回る善と悪とのバランスを維持しておくことだ。どちらかに傾きすぎると、現実のモラルを維持することがむずかしくなる。そう、均衡そのものが善なのだ。（傍点原文にあり、以下同様）わたしがバランスをとるために死んでいかななくてはならないというのも、その意味合いにおいてだ」（BOOK2 二四四〜二四

五頁）と語る。この善悪のバランスは「1Q84」の核心と言え、非常に知的な語りが印象的づけられている。また、青豆の施す激痛を伴う施術に声を出すこともない姿に青豆が敬意を覚えるように（どのよう  
うなあさましい行いをこの男がなしてきたにせよ、ここまで激しい苦  
痛に黙して耐えていることに対して、青豆は職業的な敬意を抱かない  
わけにはいかなかった」BOOK2 二二九頁）、聡明な人物として描  
かれている。村上は「アンダーグラウンド」、「約束された場所」に  
関する調査やその後の〈オウム〉裁判の聴講などから、現実の麻原の  
卑小さ（思想の貧困さ・金銭への妄執・性欲等）を目の当たりにして  
いるが、「1Q84」では敢えてリーダーを一角の人物に設定している。  
その理由として、〈オウム〉信者の多くが麻原のカリスマ性を述べて  
いることが考えられる。上祐史浩氏は獄中の麻原の振る舞いがおかし  
くなっていることを理解しつつも、次のように語っている。<sup>6)</sup>

しかし問題は複雑で、だからといって単純に「麻原はおかしい人  
間だった」と考えると、不快な嫌悪感が出てきて心が落ち着かない。  
実際に体験した麻原は、非合理的な部分がある一方で、同時に多く  
の信者の心をつかんだ一面倒見の良さや知性、そして一種の霊能力が  
あつたため、納得がいかない。

こうして、麻原を絶対とも、単なる変人とも定められず、その狭  
間で揺れていたのです。

こうした葛藤の中で、あるとき、もし条件が違っていて自分が麻  
原のような生い立ちにあり、特異な才能があつたならば、自分も麻  
原のようになった可能性があるのではないかと思つたのです。

視覚障害による差別、幼少期に不本意にも親元から離された悲し  
み、苦しみ、その後の青年期に度重なつた挫折。一方で、霊媒体質  
に基づく一定の霊能力、正当とは言い切れないが、人、物、金を集  
める才能。

もしもこういったものが自分にもあつて、つらい青年期の後に、  
一転してヨガの指導者としてブレイクし、過去の自分をも肯定する  
ような予言にふれたら、自分は果たしてどうなつたか。（一七八〜一  
七九頁）

その他、多くの（元）信者達が麻原のカリスマ性を述べている。<sup>7)</sup>ま  
た、リーダーが超能力的な力を有する描写（BOOK2 二四〇〜二  
四四頁）、弟子がリーダーの能力を崇拜する姿（BOOK2 一五二〜  
一五五頁）も多く描かれているが、これらは〈オウム〉信者の麻原像  
と重なっている。高橋龍夫氏がリーダーの身体的特徴（盲目等）が麻  
原と類似性を持つことを指摘しているが、<sup>8)</sup>身体的特徴のみならず、カ  
リスマ性を生み出した麻原の能力もリーダー像に反映されていると捉  
えるべきではないだろうか。

村上は「麻原彰晃にはそのようなジャンクとしての物語を、人々に  
（まさにそれを求める人々に）気前良く、そして説得力をもって与え  
ることができた」（「アンダーグラウンド」七〇二頁）、「そういう観点  
からすれば麻原は、限定された意味合いにおいては、現代という空気  
を掴んだ希有な語り手だったかもしれない。彼は自分の中にあるアイ  
デアやイメージがジャンクであるという認識を——たとえ意識的であ  
つたにせよそうでなかったにせよ——恐れなかった。彼はまわりにあ

るジャンクの部分を積極的にひっかきあつめて（略）そこにひとつの流れを作り出すことができた」（『アンダーグラウンド』七〇三頁）と述べている。ストーリーテラーとしての麻原の力を認め、現代の表現者として負けた面があることを真摯に受け止めているのである。それは、初期の〈オウム〉が目指していた物質ではなく精神を重んじる姿勢と「ジャンクとしての物語」が、バブル時代に違和感を感じた少くない若者の心を捉えた事実の重さを痛感しているからであろう。（「オウム」の元信者たちの手記に次のようなものがある。<sup>9)</sup>

「オウム信者は、もともと風変わりで非常識な面々だった——もしそう言い切ることができたら、どんなに気持ちが悪だろう。そうであれば、ごく一部の危なそうな人たちだけを警戒していればよい。問題はすべて警察や公安調査庁にお任せし、力づくでオウムを潰せば万事解決なのだ。しかし実際は、違う。オウムと関わった人々は、ごく私たちの身近にいる青年たちと、特別異なつた存在ではない。強制捜査の開始がもう少し遅ければ、私たちの身内や友人の中からオウムに引き寄せられる者が出たかもしれない。（二二九頁）

むしろ彼らにとつて麻原は、自分に「夢」探しをする力を与えてくれた人であり、オウムは「夢」を探す場だったのではないだろうか、と思えてならない。麻原の描いたヴィジョンは、それが空中楼阁であつても、彼らが実体のあるものと確信してしまうような実感を伴っていた、ということなのだろう。（二四〇頁）

〈オウム〉信者たちは決して非常識な面々ではなく、身近な青年たちが多かったこと。そして、そうした青年達の「夢」を探す場としての〈オウム〉の力があつたことは、決して忘れてはならない事実である。<sup>10)</sup> 江川紹子氏が二〇一九年に『カルト』はすぐ隣に オウムに引き寄せられた若者達』岩波ジュニア新書』を刊行していることから、現実に居場所を見つけれずカルトにはまる若者達は現在進行形の問題なのである。

\*

〈オウム〉（元）信者やカルトに親和性を持つ人々からすると、〈オウム〉物語群のような俗物としての教祖像は最初から拒絶反応を起しかねない。〈オウム〉の修行を実際に行い、半年以上密着取材行つた大泉実成氏は「警察、マスコミ、家族から受けるバッシングに対する反発で、これが彼らの信念を逆に強めている様子だった」、「一方的に相手の信仰を否定しても、しよせん相手を信仰に追い込むだけの結果しか得られないものだ」（二二二頁）と述べている。<sup>11)</sup>

村上は、〈オウム〉信者たちが持つていたイメージに近い教祖像のまま、そこから教祖の絶対性を疑うという戦略を取つた。つまり、リーダーをリトル・ピープルの「レシヴァ」（受け入れるもの）にし、教祖そのものに力はなく、力の「代理人」であるということを強調した。周知の通り、麻原は〈グル〉として自らを神格化させ、多くの信者をマインドコントロールしてゆく。しかし、リーダーは自らをリトル・ピープルの「代理人」（声を聴くもの）であると述べ、彼らが自分たちを見つけ、自らの神性はないことを強調する。そして、自らの苦痛から逃れるため、また世界のバランスを戻すための死を希求する。「IQ



84」のリーダー像は、いわば〈オウム信者〉（または〈オウム〉的な絶対者を希求する「自我」をシステムに委ねる人々）に対するワクチンという面を持つていてのではないだろうか。自分たちの価値観を初めから排除されるのではなく、教主の絶対性を自分で判断するということである。それは、「アンダーグラウンド」「約束された場所で」を描いた作家でなければ書けなかつた教主像とも言える。

また、「悪」を引き起こす教主を否定する物語（劇画的陰謀史観型語り、麻原集約型語り）は、教主を排除さえすれば良いという異物排除の考え方になり、問題はそこで終わってしまう。しかし、リトル・ピールという悪を生み出す根源的な力があり、教主はその「代理人」に過ぎないということになると、教主を排除することは真の解決にはならない。リーダーが語る「わたしがいなくなれば、教団そのものは求心力を失っていくだろう。しかしシステムというのは、いったん形作られれば、それ自体の生命を持ち始めるものだ」（BOK2 二四五頁）、「わたしが殺されれば、わたしの作った組織が君を放つてはおかない（略）そういう緊密で暴力的で、後戻りのできないシステムをわたしたちは作り上げたのだ」（BOK2 二八五〜二八六頁）に着目すると、教主を排除するのではなく、リトル・ピールから生み出された「システム」こそ常に警戒しなければならない脅威であることがわかる。

先の上祐氏が「もし条件が違っていて自分が麻原のような生い立ちにあり、特異な才能があったならば、自分も麻原のようになつた可能性があるのでないかと思つたのです」と語つたように、何らかの力を持つ人間は今後も誕生する可能性がある。それはすなわち、〈オウム〉

的なものの再発可能性とも言い換えられるが、重要なのは力を持つ人間を悪に導かない環境作り（システムに対する警鐘）にある。「宙返り」においても教主への依存からの脱却は描かれていたが、システムの脅威は常にあるという強い危機意識が「1Q84」では強調されている。その意味で、「1Q84」は〈オウム〉物語群とは一線を画する。

### 三 死を望む王と生殖不可能な性行為

#### ―折口信夫／『金枝篇』―

村上が取つた〈オウム〉脱構築の方法としての、「パシヴァ」「レシヴァ」であるが、安藤礼二氏・小野絵里華氏が折口信夫との関連を述べている。小野氏は「折口の天皇制論にはつねに、媒介者としての〈女〉が登場し、その〈女〉と〈王〉（天皇）との〈性〉的な関係が全面的に登場するのである」（二二六頁）<sup>12</sup>と述べ、安藤氏は「レシヴァが王でありパシヴァが少女であつて、王の近親者である。つまり、姉妹もしくは実の娘が神の声を王に届ける。これは折口信夫が「大嘗祭の本義」等で説いている天皇の規定そのものなんです」（一四頁）<sup>13</sup>と述べる。また、「宙返り」の師匠・案内人（パトロシ）の関係も「パシヴァ」「レシヴァ」と類似性を持つことが指摘されている。つまり、〈声を聴くもの〉としての「王」、「パシヴァ」（知覚するもの）／「レシヴァ」（受け入れるもの）という関係性に村上の独自性があるというわけではない。ここで留意すべきは、共通点ではなく相違点である。つまり、自ら死を希求する王と「パシヴァ」「レシヴァ」間の生殖に結びつかない暴力的な性の在り方である。

リーダーは『金枝篇』の王殺しを「任期が終了すれば殺されるものと決まっていた」、「そのように殺されることが、王たるものに与えられる大きな名誉だった」(BOOK2 二四一頁)と語っているが、『金枝篇』では次のような記述となっている。

王の生命あるいは霊は全王国の繁栄と極めて密接に共感的に結合されており、もし王が病気にいかかたり衰弱したりすれば、家畜は病気に冒されて増殖することをやめ、作物は畑で腐り、人間は疫病で絶滅すると彼らは信じているからである。そこで彼らの意見によれば、このような災厄を避けるただひとつの方法は現在の王がその専任者から継承したところの物的な霊を、それがなお活発で疫病や老齢の衰頹によつて影響されぬうちに次の継承者に転移するため、王が健康で強壮なうちに殺してしまうことである。この関係から、王の死刑執行令状を封印すると普通に言われている特殊の兆候は極めて重要なものである。彼がその多くの妻たちの熱情に満足を与えることができなくなつたとき、換言すれば部分的にであれ全体的にであれ彼の種族を繁殖することができなくなつた時こそ、彼は死んでいっそう元氣な後継者にその位置をゆずるべき時なのである。(『金枝篇』二 岩波文庫 二二三―二三四頁)

ここでは、王の生命や霊が王国の繁栄と結合しており、王の衰弱は王国の滅亡に繋がるため、次の継承者に転移するための王殺しが行われていたとある。注目したいのは「彼がその多くの妻たちの熱情に満

足を与えることができなくなつたとき、換言すれば部分的にであれ全体的にであれ彼の種族を繁殖することができなくなつた時こそ、彼は死んでいっそう元氣な後継者にその位置をゆずるべき時なのである」という記述である。つまり、王殺しは王国の繁栄のための儀式であり、それは子孫を残すという生殖(生産)が何よりも重視される。そして、王の死を決めるのは、王ではなく他者(妻や家臣等)である(妻たちはそのことを長老たちに報告する。長老たちはこの運命を王に告げ知らせるため、暑くるしい午後ひるねをしている彼の顔と膝に白い布をかけたと言われる。刑の執行は死の宣告の直後である。『金枝篇』二 岩波文庫 二三一頁)。対して、リーダーが求める王殺しは、繁殖不可能性によるものではなく、苦痛からの解放とリトル・ピール側に傾いた世界のバランスを取り戻すための死である。リーダーが自らの死を望む姿は麻原の姿勢とは正反対であり、かつ、折口の言う古代天皇制やフレイザーの王殺しとは質が異なっている。つまり、王(リーダー)は王国(教団)の繁栄を望んでいない。

王国の繁栄を望まない王という設定は生殖不可能な性行為とも関わする。リーダーの性行為は、初潮がない少女との交合であり、受胎は不可能である。「さきがけ」の信者は生殖不可能性の行為からの受胎という恩寵、いわばキリストの処女懐胎のような奇蹟が起きることを望んでおり、リーダーはこの行為の無意味さに気づいている(「まだ誰も妊娠してはいない。その可能性もおそらくない。彼女たちには月経がないから。それでもなお女たちは恩寵による奇跡を求めている」BOOK2 一九九頁)。少女たちの子宮は破壊され、妊娠できない身体となり、この宗教的行為が凄惨な性暴力であることが強調されている。更



に、BOOK3では「声」（リトル・ピープル）の要望で、青豆の「小さなもの」を教団が狙う姿が描かれている（教団にとって、新しい預言者を獲得することが何より重要な使命になった。声が語りかけることをやめれば、その共同体は存在基盤を失ってしまう）BOOK3（三六三頁）。ここで強調されているのは、教団に必要な存在は（声を聴くもの）であり、リーダーではない。能力があるリーダーを「救世主」「偉大なグル」といった絶対者として描かない姿勢、「さきがけ」の奇蹟の否定、宗教行為としての性行為の暴力性という形で「さきがけ」という教団の価値そのものを疑わせている（オウム）脱構築の徹底。

#### 四 〈家族〉の復権

##### ―二つ目の〈オウム〉脱構築―

最後に、BOOK3の青豆が妊娠するという展開、換言すれば、BOOK2の刊行後にBOOK3を描こうと作家を駆り立てた理由について考察してみたい。石田仁志氏は、天吾と青豆（あゆみにも言及）を「児童虐待」を受けた子どもたちと捉え、次のような重要な指摘を行っている。<sup>16</sup>

児童虐待というのは、家族という我々にとって最小の共同体でありかつ養育上避けては通れない必要不可欠な人間関係の中で生まれる、根源的な暴力である。それは「国籍や人種や宗教」を超えた次元で「我々」が直面する問題なのではないだろうか。むろんそこに「システム」という言葉を使うのなら、この暴力を生み出している

のは「我々」自身の家族観、養育感、教育観など歴史的文化的に構築されてきた価値観というシステムなのではないだろうか。（六五頁）

石田氏が的確に述べるように、家族というシステムは最小の共同体であるが故に根源的であり、そこで行われる暴力は存在の根幹を左右する。「1Q84」は、天吾・青豆、あゆみに加え、ふかえりもリーダーからの性暴力を受けている。更に、環や老婦人の娘は夫のDVを苦に自殺した。BOOK2までは破綻した家族の群像が描かれていると言える。

このような破綻した家族の絆の代わりとして、青豆と老婦人とタマルとの関係が描かれている。青豆はリーダー殺害後、タマルに全幅の信頼を置き、それを「擬似的な血」と捉える（タマルが私に伝えたかったのは、私は今では彼らの属しているファミリーの不可欠な一員であり、いったん結ばれたその絆が断ち切られることはないというメッセージだったのだろう。（中略）私たちはいかなれば擬似的な血で結ばれているのだ」BOOK2 三二二頁）。しかし、その関係について青豆は次のようにも考える。

しかしそのような密接な関係が、暴力というかたちを通してしか結ばれないのだと思うと、青豆はやりきれない気持ちになった。法律に背き、何人かの人を殺し、そして今度は誰かに追われ、殺されるかもしれないという特異な状況に置かれて、私たちはこのように気持ち深く結び合わせている。しかし、もしそこに殺人という行

為が介入しなかったら、そんな関係を打ち立てることは果たして可能だったろうか。アウトローの立場に立つことなく、信頼の絆を結ぶことはできたであろうか。おそらくむずかしいはずだ。(BOOK2 三七二〜三七三頁)

BOOK2までの段階では、強い絆は「暴力」を介したもので、かつ「アウトローの立場」でしか描けなかった。BOOK3における青豆の妊娠は、これまでの歴史性を背負った家族というシステムや「暴力」というかたちを通してしか結ばれない、「アウトローの立場」からの絆を超えた関係性の構築を目指すものではないだろうか。家族に傷つけられた青豆が〈家族〉を作り出そうとする行為は矛盾するようにも思えるが、〈家族〉の復権は、〈オウム〉脱構築と繋がっている。

多く指摘されていることだが、〈オウム〉は根源的に家族の否定をし、教団での関係性を絶対化した。大澤真幸氏は「オウムは、特定の家族だけではなく、家族的な関係性そのものをはや基礎的なものとはみなしていない」(二一九頁)と述べ、次のように続けている。<sup>17)</sup>

家族否定に対するオウムの過激さ——方舟のようなそれまでの宗教をはるかに凌駕する過激さ——は、千石だけではなく、一般の人々の間にも直感的に嗅ぎ分けられていたように思う。オウムが犯したと見なされている数多くの殺人事件の中で、最も多くの人々の怒りを呼び、象徴的な意義を担わされているのは「坂本堤弁護士一家殺害事件」である。(中略)坂本堤弁護士一家殺害事件が象徴的な意義を担うのは、その悲惨さゆえではない。この事件を報道する度に、

テレビは、弁護士一家の幸せそうな典型的な核家族の映像を映し出す。オウムが憎まれるのは、この幸せな家族を抹殺したからである。おそらく人々は、この事件を通じて、家族的なものを根源的に否定しようとするオウムの志向性を直観したのであり、これに強い拒否反応を示したのである。たとえば、犯人たちが、麻原の指示に従って本人と妻とその幼い子供の死体をまったく離れ離れの場所に埋めたことが、人々の強い嫌悪を誘った。このような埋葬の方法が、麻原とオウム教団が家族的な関係をまったく問題にしていなかったことを、あからさまに示しているからだろう。

オウムが家族を拒否するのはなぜか？ この教団の信仰世界の中では、先に述べた「極限的に直接的なコミュニケーション」のみが、本質的なものと見なされるからである。(一三〇〜一三二頁)

〈オウム〉においては、教祖と個との直接的な関係が絶対であり、たとえ家族であっても排除しなければならない関係性となる。青豆は性行為を伴わない受胎を天吾の子と信じ、「私はもうこれ以上誰の勝手な意思にも操られはしない。これから私は自分にとつてのただひとつの原則、つまり私の意思に従って行動する。私は何があるうと、この小さなものを護る。そのために私は死力を尽くして闘う」(BOOK3 五三一頁)と決意する。この青豆の決意は、「アウトローと暴力によって結ばれた絆ではなく、愛する人との子供、〈家族〉を守ることを重視する考えである。つまりBOOK3は、〈家族〉の復権という二つ目の〈オウム〉脱構築を目指しているのではないかと考えられる。

その上で、青豆は「もしそれが天吾の物語であると同時に、私の物

語でもあるのなら、私にもその筋を書くことはできるはずだ」、「結末を自分の意志で決定することができるはずだ」（BOOK3 四七七頁）といった自らの意志で自分自身の物語を作り出す可能性に言及している。この青豆の意志は次の「アンダーグラウンド」の意識を反映しているだろう。

あなたは誰か（何か）に対して自我の一定の部分を差し出し、その代価としての「物語」を受け取ってはいないだろうか？ 私たちは何らかの制度システムに対して、人格の一部を預けてしまっていないだろうか？ もしそうだとしたら、その制度はいつかあなたに向かって何らかの「狂気」を要求しないだろうか？ あなたの「自立的パワープロセス」は正しい内的合意点に達しているだろうか？ あなたが今持っている物語は、本当にあなたの物語なのだろうか？ あなたの見ている夢は本当にあなたの夢なのだろうか？ それはいつかとんでもない悪夢に展開していくかもしれない誰か別の人間の夢ではないのだろうか？（七〇四～七〇五頁）

〈オウム〉事件から村上は、自我を譲り渡すことの危険性を強調してきた。そして自我を譲り渡すシステムに対抗する手段として〈物語〉の可能性を述べてもきた（「壁と卵」エルサレム賞スピーチ等）。青豆の闘う「意志」を導きだしたのは、天吾への愛と「小さなもの」を護るといふ〈家族〉としての関係性であり、この「意思」はBOOK3の核心と考えられる。

しかし〈家族〉の復権のため、青豆という魅力的なキャラクターの

性格が変更されたことは「1Q84」そのものの魅力をダウンさせた。BOOK2まではタフでクールな青豆が躍動していたが、BOOK3になって受胎したことや、潜伏生活を送ることで性格は受け身になる（「天吾くん、あなたはどこにいるの？ 早く私を見つけ出して。誰かが私を見つけ出す前に」BOOK3 一〇一頁）。その上で、天吾と再会し、ハッピーエンディングを迎える展開は、中村三春氏の「BOOK3に至って、青豆・天吾物語は、既に陳腐化した。つまりそれは予定調和の世界なのである」（二五五頁）という言葉で言い尽くされているだろう。<sup>18)</sup>

また、性行為を伴わない受胎について、「さきがけ」では奇蹟は否定されたが、BOOK3では天吾と青豆の愛が真実である証として描かれている。ただ、青豆や天吾がこの奇蹟を「信じる」という言葉で疑問を持たず受け入れる姿勢は疑問である。

「（前略）でももし君がその夜に受胎したのだとしたら、そしてほかに思い当たる可能性がないのだとしたら、君の中にいるのは間違いなく僕の子供だ」（中略）

「でも本当に信じてくれるのね？ 私の中にいる小さなものがあなたの子供だと」

「心から信じる」と天吾は言う。

「よかった」と青豆は言う。「私が知りたかったのはそのことだけ。あなたさえそれを信じてくれるなら、あとのことはもうどうでもいいの。説明なんかいらぬ」（BOOK3 五七八頁）

村上文学では超自然の出来事が起き、主人公達がそれに戸惑いながらも一つずつ辛抱強く対処してゆき、それらの出来事を受け入れるという物語が多くある。「1Q84」では物語の展開として納得させる形ではなく、「信じる」という言葉だけで展開させている。(このような姿勢は「騎士団長殺し」の結末で「私」がむろに語りかける言葉と同じ) BOOK3は、〈家族〉の絆がカルトやアウトローの関係を越えるものであり、その絆を信じることで自分が主体の物語を描く、自己の意志を貫くという主題(二つ目の〈オウム〉脱構築)が先にあつて、それに合わせるためにキャラクター変更や物語展開が行われてしまったと考えられる。

### おわりに

「1Q84」は、〈オウム〉物語群とは異なるアプローチで〈オウム〉脱構築が行われている。

1、麻原的なカリスマ性を付与されたリーダーが全能の絶対者ではないことの強調(王国(教団)の繁栄を望まない王(教祖)、奇蹟の否定)。何よりも危険なのはカルトを生み出すシステムであり、麻原的なものを排除することで問題は解決しないという強いメッセージ性。

2、〈オウム〉で否定された〈家族〉の絆の復権(「小さなもの」。誰かの意思に従うのではなく、自らの意思で行動すること、物語を自分で書き換える主体性の強調)。

このうち1の教祖像は、カリスマ性を残しながらシステムの脅威に

目を向けるという方法が取られ、他の〈オウム〉物語群とは一線を画する。2の〈家族〉の復権であるが、こちらは主題を描こうとしてキャラクターの改変が行われた結果、物語そのものの魅力が失われる結果となっている。

前出の中村氏は「青豆・天吾物語としての『1Q84』という観点から見ると、BOOK3は、むしろ不要だった」と捉え、BOOK3は「牛河物語としての要素を注入してBOOK1・BOOK2の世界を大きく変容させ、<sup>19)</sup>つまり書き換えて、小説テキストの可能性を途方もなく拡張した」(二七七頁)<sup>20)</sup>と結論づけた。稿者は中村氏に首肯しつつも、牛河物語だけでなく、BOOK3の青豆・天吾物語にも可能性があるのではないかと考える。それは、BOOK3には〈オウム〉脱構築としての〈家族〉の復権を目指す試行が現れているからである。BOOK3の青豆の妊娠と天吾との再会は、「児童虐待」とも言える扱いを受け一度は家族と決別した青豆と天吾が、自らの意志で〈家族〉を作り上げ、暴力的なシステムを内包する教団の消滅化を図るといふ、システムに対抗する〈物語〉を目指すものであった。家族によって傷つけられた二人が新しく生み出そうとする〈家族〉は、二重のシステム(家族を否定し教祖との絶対的な関係性を重視する〈オウム〉、最小の共同体ゆえに存在の根源を左右する影響力を持つシステム)克服を目指すものである。もし、愛と〈家族〉の描き方が「予定調和」を超えるものであったならば、〈物語〉の可能性はより広がったのではないだろうか。<sup>21)</sup>

「1Q84」で行われた〈オウム〉脱構築は、〈オウム〉に対する警戒心が薄れつつある現在、自らの物語を描くことを放棄し、別の人間

の価値観に依存する—カルトに引き寄せられる—若者達という現在進行形の問題を再認識することに繋がるだろう。更に、システムに対抗する〈物語〉の可能性(「予定調和」に陥らない〈家族〉の復権)は、現代の〈物語〉として今後も問わねばならない重要な問題領域と考える。

注

- (1) 七月六日…麻原彰晃(本名・松本智津夫)、土谷正実、遠藤誠一、新實智光、井上嘉浩、中川智正、早川紀代秀。七月二十六日…岡崎一明、豊田亨、端本悟、林泰男、広瀬健一、横山真人。
- (2) 青沼陽一郎「オウム真理教の膨張が止まらない」『サンデー毎日』二〇一八・二・一八)によれば、「公安調査庁によると、アレフの昨一〇月末の時点で、現金、預貯金、貸付金をあわせた資産一〇億円を超えたというのだ」と述べられている。
- (3) 安藤礼二「王を殺した後に 近代というシステムに抗う作品『1Q84』」『村上春樹』1Q84』をどう読むか』河出書房新社・二〇〇九)、村上克尚「小説は宗教に何を語りかけるのか——村上春樹と大江健三郎の差異」『1Q84 STUDY BOOK2』若草書房・二〇一〇)
- (4) 生駒夏美「悪者づくり—オウム真理教事件の物語化を巡って—」『アジア文化研究』二〇〇九)
- (5) 田口ランディ『逆さに吊された男』(河出書房新社・二〇一七)
- (6) 田原総一郎+上祐史浩『危険な宗教の見分け方』(ポプラ新書・二〇一三)

- (7) その他、滝本太郎・永岡辰哉編著『マインドコントロールから逃れて』(恒友出版・一九九五)、大泉実成『麻原彰晃を信じる人びと』(洋泉社・一九九六)、林郁夫『オウムと私』(文藝春秋・一九九八)、早坂武禮『オウムはなぜ暴走したか』(ぶんか社・一九九八)、カナリアの会編『オウムをやめた私たち』(岩波書店・二〇〇〇)、加藤秀一『カルトにはまる11の動機』(アストラ・二〇〇〇)、上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』(扶桑社・二〇一三)等多くの文献でオウム信者は麻原のカリスマ性について言及している。

- (8) 高橋龍夫「可能性としての物語 「総合小説」としての『1Q84』」『村上春樹 表彰の圏域—』1Q84』とその周辺』森話社・二〇一四)「作品内では五〇歳前後と設定されたリーダーの森田保もやはり視覚障害を持ち、同時に「前例のない奇病であり、現在の医学知識では手のうちようがない」筋肉の硬直に見舞われていた。(略) 恐らくここには、松本智津夫の身体的事情が反映されている」(三四頁)

- (9) カナリアの会編『オウムをやめた私たち』(岩波書店・二〇〇〇)
- (10) 高橋英利『オウムからの帰還』(草思社・一九九六)では次のように述べられている。

実際にオウムに飛び込んでみておどろいたのは、自分と同じような悩み苦しみをもった人がじつに多く、しかもそうした悩みを包み隠さず話しあうことのできる人ばかりだったことだ。僕はそれまで自分のなかで抱えもつてきた精神的な問題を、一気に放出するような感じで話した。誰にも話せなかったことを、自由に、しかもかなり深く掘り下げて話すことができ、僕はとても満たされる思いがした。

そして、僕の知っているどの集団ともケタ違いの熱気が満ちあふれて

いた。オウムの人たちが「救済」と言うとき、それは抽象的な標語なのではなく、きわめて具体的なイメージがともなっていると感じられた。この人たちなら、ほんとうに世界を変えられるかもしれない。少なくともそう確信して行動している。そんな印象を強く受けた。

自分のエネルギーをすべて発揮して何かに打ち込みたいと願っている人は、じつはとても多いのではないだろうか。しかし現実の社会のなかではそれはなかなか叶わないことだ。社会、組織、集団、あるいは自分自身によっても僕達は縛られている。その縛られたままの状態を日々を送らなければならない。それが当たり前になっている。だが、オウムではすべての人がたいへんなエネルギーを発散していた。自らの信じるものへと邁進する喜びに満ちていた。そんな集団が実際に存在しているということが驚きだった。

だからオウムとの出会いは衝撃であると同時に喜びでもあった。やつと見つけた、ついに自分の居場所を見いだした、と僕は思った。その喜びのなかで一気にもりこんでいったのだ。(五七―五八頁)

(11) 大泉実成『麻原彰晃を信じる人々』(洋泉社・一九九五)

(12) 小野絵里華「王権は繰り返される——『1Q84』における〈性〉と〈血〉をめぐる」『1Q84 STUDIES BOOK2』若草書房・二〇一〇

(13) 注(3)の安藤礼二氏に同じ。

(14) 注(3)の村上克尚氏に同じ。

(15) 正確に言えば、巫女達のドウタの子宮が破壊されているが、その行為が暴力的であることは言を俟たない。

(16) 石田仁志「村上春樹『1Q84』における〈家族 表象〉」『文学論藻』二〇一七・二

(17) 大澤真幸『虚構の時代の果て世界最終戦争——オウム』(ちくま新書・一九九六)

(18) 中村三春「ライティング・スペース『1Q84』BOOK1・2からBOOK3へ」『村上春樹 表象の圏域——『1Q84』とその周辺』森話社・二〇一四)

(19) 「騎士団長はほんとうにいたんだよ」と私はそばでぐっすり眠っているむろに向かつて話しかけた。「きみはそれを信じた方がいい」「騎士団長殺し」(新潮社・二〇一七 第二部 五四―一頁)

(20) 注(18)に同じ。

(21) 例えば、BOOK4以降の物語が書かれない事は、システムに回収されない〈物語〉の可能性と考えることも可能である。村上はインタビューで次のように述べている。(「朝日新聞」平成の30冊「村上春樹さんインタビュー」平成を映し、時代と歩む」二〇一九年三月七日 <https://book.asahi.com/article/12182812>)

——『1Q84』はBOOK3で完結のですか。

『1Q84』と『ねじまき鳥』の共通点は、第2部まで書いて間置かず第3部を書き始めたこと。作品としてまとまった。でも結論は出さない。『1Q84』は、三遊亭円朝の落語『真景累ヶ淵(しんけいかさねがふち)』みたいな長い因縁話の一部なんです。天吾のお父さんやお母さんがどうやって出会ったとか、わからないでしょう。天吾と青豆の二人がコスタリカに行った後のこと、二人の娘のこととかも。話はできているんだけど。ジャズで和音の基音を省いちゃうのと同じで、空白を残したい。別の物語が不思議なトンネルでつながる曼荼羅のようなのは



好きですね。

村上は続きとして青豆達がコスタリカに行き、二人の娘という等、いくつかの設定を考えているが、「空白」を残したいと述べている。この態度は、作家の逃げとも取れる態度であるが、「敢えて物語を描かない」ことに〈物語〉の別の可能性が生まれると捉えることもできる。つまり、BOOK3で青豆の妊娠と天吾と結ばれる結末にすることで、不十分ではあるが〈オウム〉脱構築としての〈家族〉の復権を示す。その後には青豆たちがリトル・ピープルと対峙する続編を書くことは、〈家族〉の復権が何よりも大事という〈家族〉絶対主義という別のシステムを生み出す危険性がある。そういったシステムに回収される危険性を回避するために、敢えて続きを書かない、という解釈である。これはシステムを生み出す危険性を回避する物語―脱構築し続ける〈物語〉―としての可能性を持つ。しかし、現在描かれた「1Q84」の中では〈家族〉の復権の部分の不十分であり、システムを脱構築する〈物語〉であると結論づける論拠を持ってない。

**付記**

本稿は、二〇一九年度第八回村上春樹国際シンポジウム「リーダー像からみる「1Q84」―「1Q84」世界からの〈移動〉の是非―」（二〇一九年七月二日 北海道大学）、二〇一九年度広島大学国語教育学会「村上春樹「1Q84」論―〈オウム〉脱構築の可能性と問題点―」（二〇一九年八月一日 広島大学）における口頭発表を基にしている。席上、多くの貴重な意見を賜った。記して感謝申し上げる。

テキストは『1Q84』（BOOK1・BOOK2、新潮社・二〇〇九、B

OOK3 新潮社・二〇一〇）、『アンダーグラウンド』（講談社・一九九七）を使用した。傍線は私に付した。

（やまね・ゆみえ 広島国際大学・非常勤講師）